大学・大学院での研究活動と文献検索の現場

諏訪敏幸
大阪大学、国立成育医療研究センター

■会場からの質問

Q1　スクリーニングに適切な件数は、シチュエーションによっても、相手によっても、変わるということでしたが、適切なスクリーニング件数がどれくらいかをどうやって判断されてますか？

A1　ご質問ありがとうございます。
慣れもあり、一概には言えませんが、相談に来られた機会とか講義の時などに、自分でどのくらい見れるか件数をつかんでおいてくださいと言ってます。
場合によって、[こちらの判断で] 件数を少なくする方が良い場合もあります。例えばこれからどんな研究をしようか模索的に見たいという時は、件数をちょっと少なめにします。検索で件数を減らしていくプロセスというのは、極めて荒っぽく、その裏で要るものが落ちるリスクは絶対にある。コンピュータの荒っぽい判断だけではダメだから、人間の目で質の高い判断をしようというのがスクリーニングの意味です。だから無理をして判断の質が落ちるのでは、スクリーニングをする意味がない。そこのバランスを取らなきゃいけない。こういったことを説明して何件ぐらいですかという相談をします。そこら辺をご自分で判断していただいたらいいんじゃないかと思います。

Q2　出版される論文の数自体がどんどん増えてるので、検索しても全然数が落ちないみたいなところがけっこう悩みがあるのかなって思っています。

A2　最近 10 年で切るといった[外形的要素で絞り込むような]方法はやめた方が良いと思います。
一つのやり方として、とりあえずスクリーニングができる件数の数倍程度の範囲ならいっぺんダウンロードしてみる。Excel に落とすんだったら、Excel の機能でそこからまた絞り込みとかピックアップとかできます。そういったものを使いながらちょっと広い範囲で様子を見る、特に先行研究調査で早い段階でやる場合は、その方が良い場合がよくあります。落としたから全部見なきゃならないということにこだわる必要もないかなと思います。上からずっと見ていって、疲れたらやめる、でもいいんです。
（回答補足）この質疑は先行研究調査などの検索、つまり探索的な性格を強く持つ検索の場合に関するものだということを前提にしています。また、結果件数が極度に多い/少ないときは、場合によっては検索課題・研究課題に戻って検討し直すということもここまでの

話で述べており、それも暗黙の前提です。これとは異なり、探索的性格に乏しい（特にパラメータ集約型―いわゆる「メタアナリシスあり」―の）量的システマティック・レビューなどでは可能な限り検索漏れを避けるためスクリーニング件数の要求も引き上げられますので、当然その範囲ですべてダウンロードし、すべてスクリーニングします。こういった前提は会場の質疑応答時には一連の話の流れの中で了解されていたと思いますが、この回答だけ切り離すと誤解を生む可能性があるため、念のため補足します。

■遠隔参加者からの質問

Q3　課題のあいまいさを確認した結果当初の課題と変わってしまった場合はどう対処するか。

A1 ご参加とご質問ありがとうございます。時間がオーバーのためご回答が遅れて申し訳ありません。以下ご質問への回答です。
当初の課題からの変化の意味・内容にもよりますが、単なる動揺ではなく研究課題（研究計画）がより精密になった、あるいは発展したということであれば以後はそれに沿って進めていきます。研究過程でテーマが発展するのは研究の常で、そのこと自体は問題がないと思いますし、そこは最終的に研究者自身の判断です。ただ、確認作業や検索の場での変化はあくまでも新たな情報が流入する中での判断で、研究者がその情報を正しく消化するにはもう少し時間が必要かもしれません。研究者本人にもまだ見えていない、未確定なところがありそうでしたら、そこはあまり方向性を狭めてしまわないよう、また研究者自身が前のめりになりすぎないよう、柔らかく進めていきます。おそらく研究者はこれからもさまざまな情報に接して自分の研究を見直していくでしょうから、その時に何が参考になるかということを意識しながら以降の議論や検索をしていきます。

Q４　（コメント）データベースの信頼性に同感。あるデータベースでは日本語誌の採録巻号が調査時によって異なることがあった。

A2　ご参加とコメントありがとうございます。非英語誌、特に非欧米誌の採録状況はいわゆる「大人の事情」や実務的事情、それに商品政策なども含めて様々な要因が働いて動揺することがあるようですので、ご指摘のような例は例外的ではないのかもしれません。その一部は仕方ないことなのかもしれませんが、こちらとしてはいつ、どんな変化が、どんな範囲で起こったのか、そのつど時間差を置かずに具体的に周知してほしいものです。単に「ちょっと何か見つけたい」という使い方ならあまり問題にならないのですが、SR や研究状況調査では致命的な問題になりかねません。ご指摘に同意です。

Q５　2020 年 5 月に PubMed が新システムになった際に PMID の重複付与が起こった。紹介された事例（2020 年 4 月～7 月の間に同一の検索方法にもかかわらずある年代だけ集中的に減少した）はこれに関連あるのではないか？

A3　ご参加とコメントありがとうございます。データベースの不安定さはいろいろな形で起こるのですが、説明がないと本当に気持ち悪いものです。ご指摘の点ですが、結論的に申しますと、何か影響がある可能性はあるかもしれませんが、起こった問題自体はおそらく別の事象だと思います。理由は次の 2 点です。

1.
このデータベースの名前は伏せましたが MEDLINE とは別のデータベースで、この検索の範囲内での MEDLINE との重複は（正確な数字は取っていませんが）このような規模での減少を引き起こすほどではないと考えられます。

2.
実は 7 月初めにも同じデータを取っており、その時も 4 月と同じ結果だったと記憶しています。このデータが残っていないので、今回は 4 月のデータを使いました。つまり時期的に 5 月の重複付与発覚後も 4 月の状況が続いています。
これが重複付与によるものだとすると、単純比例計算で MEDLINE 全体に換算すると数百万から 1000 万件ほどの重複データがこの時点で削除されていなければなりません。PMID の重複の詳細を知りませんので比較ができないのですが、MEDLINE での問題はこのくらいの規模のものだったでしょうか?

Q６　オープンアクセスの紀要文献は信頼できる文献とみなせるか。

A4 ご参加とご質問ありがとうございます。時間がオーバーのためご回答が遅れて申し訳ありません。以下ご質問への回答です。
原則論としては、文献が信頼できるかどうかは個別の文献レベルの問題で、掲載誌や国その他の外形的条件だけで一概に決めつけず、その内容に即して判断されるべきものです（と院生には教えています)。日本の医学・看護の実情に即して言えば、紀要の編集・発行が適切に行われていないため、紀要論文に質の低いものが多いのは事実です。他方看護学では学会誌も含めて水準に疑問の生じるものが少なからずあり、逆に紀要文献でないから信頼できるとも言えません。したがって学部生や看護師はともかく、院生・教員以上の研究者の場合は、論文の質の良しあし・信頼性という個別論文レベルの問題は個々の論文に即して判断するべきだという原則論に戻ることになるというのがお答えとしては適切ではないかと思います。オープンアクセスについても同様です。ただしオープンハゲタカジャーナルの場合は投稿者の姿勢も問われますので、単に外形的問題とは言えません。ちなみに、もともと紀要的な雑誌だったものが一流紙になった例として看護分野では
Journal of Nursing Scholarship が、またトップジャーナルが大学誌で独占されている例としてはアメリカ法学の例があります。